克彦は黙つて部屋の中へはいつていつた。電燈が消されてゐるので部屋の中は眞つ暗だつた。窓から流れこむ星あかりが彼のかげをうすく絨氈の上にぼかしだしてゐた。その部屋の中で彼はしばらく棒のやうに立つてゐたが、やがて四方の壁にそつて大股にぐる〳〵と歩きはじめた。——

長い時間が經つたやうな氣がした。奇妙な運命のからくりがあつて自分はその中をひきづり廻されてゐるといふ感じがした。しかし次の瞬間、彼は部屋の扉をあけて廊下へとび出してゐた。

すぐ眼の前を白い給仕服を着たさつきのボーイが兩手をふりながら食堂の方へ歩いてゆく。——その姿をみとめると彼は足早に近づいてうしろから力强く肩を敲いた。

「ねえ君！頼みがあるんだ！」

「な、なんです？」

給仕はうしろに立つてゐる克彦の顏の中から異様な昂奮を感じて、びくつとしたやうに立ちどまつた。

「——これをね、さつきの女に渡してくれるんだ、なるべくこつそりとね、この役目を果してくれたら、どんなに君に感謝するか知れないんだ！」

彼は最後の言葉だけ、わざと耳のそばで小さく囁いてから、上着の内かくしの中に手を突ッ込んで一枚の名刺をとりだしだ。その裏に萬年筆で、「今夜、グリル食堂の前の廣場にてあなたのお歸りを待つ」と走り書きに書いてしまつてから、ボーイの手に渡した。

「あの、たしか、お若い方の方でございましたね？」

「さうだ、——和服を着てゐる方だ！」と、克彦は敲きつけるやうな聲で言つた。

5

荒川克彦はこまかい砂利を敷いた廣場を足にまかせて、往つたり來たりしてゐた。いかにもホテルの泊り客が夕食後の氣晴らしに散歩してゐるといふ恰好だつたが、しかし、時間が經つにつれて彼の歩き方はだんだん亂調子になつてきた。

非常にゆつくりと一歩一歩を踏みしめて、忍ぶやうに歩いてゐるかと思ふと、こんどは大股にはげしく地面を蹴つてせかせかと歩きだした。それから、急に物におびえたやうに立ちどまつた。交詢社の建物の影が黑く廣場の上に落ちてゐるので裏門から入つてくる人にも彼の顏はまるでわからなかつた。

ガードの上をすべる省線電車の轟音がひゞいてきた。一つの轟音が長く空間に尾をひいて消えてゆくとあたりはひつそりと靜まりかへつたが、しかし新しい轟音が續いてひゞいて來た。食堂の扉がぐるぐるつと廻つて、洋裝した一人の女が出てきた。彼はどきつとして立ちどまつた。だが、それはま

つたく見覺えのない顏だつた。女は彼の前を通りぬけて自動車のならんで居る門の方へ歩いていつた。

そのとき、洋裝の女とすれちがひに白い麻の夏服を着た男が二人はいつてきた。高らかに笑ひながら話し合つてゐる二人の聲がもつれかゝるやうに克彥の耳に溶けこんだ。

……「仁科もいよ〳〵フランスへゆくんだつてね」

「だから、彼にとつては思ひ出の深い演奏會さ、思ひ出と言へば、ずゐぶんいろんなロマンスがあるだらうからな」

「ところがね、案外古風なお坊つちやんで、あの男の色魔ぶりは噂ほどぢやあないといふ話だ——今度の洋行も、さういふ過去の生活に一段落を告げるためだといふわけだつてね」

「告げるためぢやなくて、告げざるを得なくなつたのさ——この前會つたときにもね、日本といふ國は息苦しいつてしきりにこぼしてゐたぜ」

二人は廣場を突切つて「演戲場」の入口の方へ歩いてゐつた。克彥の胸は急に痙攣を起したやうに高鳴つてきた。彼はそつと忍びやかに二人のあとからついていつたがしかし話はそれきりで途切れてしまつた。彼は右手の階段をのぼつてゆく二人の姿を茫然として見詰めてゐた。そのとき、うしろの方から人の近づいてくる氣配がしたので、慌てゝふりむくと、白い給仕服のボーイがしきりに彼を探してゐるところだつた。

「おや、此處にゐらつしたんですね、どうなすつたのかと思ひましたよ」

「——さつきから、このへんを歩いてゐたんだ、それで……」

ボーイは彼の言葉をのこらず言はせないで愛想のいゝ笑ひをうかべながら

「すぐにゐらつしやいますよ、わたしもね、こつそりお渡しするにはなか〳〵骨が折れましたよ」

「いや、ありがたう」と、克彥はひそやかな感謝の意味を含めてボーイの肩を輕く敲いた。

「あゝ、それから、——すつかり忘れてゐましたがね、今から五六分前に奥さんからお電話がありましてね、急にダンスがはじまつたんで、今夜おそくなるかも知れないつて、——さうお傳へしてくれといふことでしたから」

克彥は返事をするかはりに默つて前へ歩きだした。それから彼はふと思ひ出したやうに明るい聲で

「今夜此處の演戲場で何かあるんだつてね?」

「えゝ、聲樂家の仁科さんの、——ほら渡佛記念とか何とかいふ……」と言ひかけて、ボーイは急に彼の方に眼くばせして、すぐ前の建物のかげへはいつていつた。グリル食堂の前に、しきりにあたりを見廻しながら、一人の女が立つてゐる。

廣場のまん中に二人は立つてゐた。どつちが先に進みよつたといふともなく、二人は何時の間にか向ひ合つてゐるのだ。

美和子は下を向いてぢつと足元の砂利を見詰めてゐた。すると星あかりに照された彼女のやつれ面のした横顔が克彦の心にさびれた感慨をよび起した。——この半年あまりの間にこの女はまるで以前の少女らしいあどけなさを失つてしまつてゐるではないか！

「美和子さん」——と、克彦は幾度びとなく叫びかけようとしたが、しかし、言葉か咽喉につかえて出て來なかつた。彼は何かしら深い人生の眞實に觸れてゐるやうな氣持になつたのである。それはたとえやうもなく嚴肅な瞬間であつた。二人はお互に呼びかけやうとしてゐるのだが、しかしさういふ氣持になればなるほどわれとわが心に撥ねかえる感情が、ます〳〵遠くへ二人を追ひやつてしまふもどかしさをどうすることもできなかつた。

「……美和子さん！」

克彦の唇からやつとの思ひで一つの言葉がすべり出た。

美和子が顏をあげた。——その顏は、悲しげに瞬いてゐるにもかかはらず深い憎惡がぢり〳〵と彼の心に迫つてきた。

「どうです、——僕の部屋へゆきませんか？」

その言葉はおど〳〵と顫えて、それはもう明かに彼の心が安定を失つてゐることを示してゐた。

「——え、、でも」と言ひかけて美和子は落ちついた聲で、しかし彼女の瞳は深い冷嘲を湛えながら、——

「——でも、もう何も無いんぢやないの、——お話することは……」

「どうして？」

「わたし、もうすつかりわかつてるのよ、だから、これ以上……」

「これ以上話す必要が無いと仰しやるんですね、いや、——僕には話すことがあるんです、話すよりも、あなたにお記しなければならないことが——」

「それは、あなたの氣休めに過ぎないのよ、あなたはわたしのことを御心配にならなくつたつていゝわ」

「そんな、——妙だな、あなたは何か誤解してゐるんぢやないのかな、僕の氣持は以前と少しも違つてゐないんですよ」

「それは、よくわかるのよ、でも氣持は同じでも事實と境遇が違つてゐるわ——だから、あなた御自身をこれ以上お苦しめになるには及ばないことよ」

「何だか僕にはまるでわからないな、兎に角どつちにしても僕の部屋まで行つて話をしようぢやな

いですか？」

「でも、それは結局あなたの御迷惑になるんぢやないの？」

「何故？」

「――だつて、あなたはお二人で泊つてゐらつしやるんでせう？」

その言葉は克彦の心臓を貫くに充分であつた。もう駄目だ！と思つた。しかし、その氣持の底から新しい太々しさが湧いてきた。毒を喰はゞ皿までだ――といふ捨鉢な勇氣が萎れきつた彼の心に最後の飛躍を試みる機會を與へたのである。

「何だ！あなたはまるで誤解してゐる、そんな莫迦な、――まるで話が違ふんですよ、兎に角、ね僕の部屋まで……」

不思議に彼は何の淀みもなく、愉快さうにから〳〵と笑つた。彼は先に立つて歩きだした。

7

自分の部屋の前で彼はあとからくる美和子をふりかへつた。彼は扉をあけて、響きのある聲で、「さあ、どうぞ！」と言ひながら、美和子を先に入れてしまつてからもう一度廊下の方を見廻した。

部屋の中はさつき電燈を消したまゝになつてゐるので眞つ暗だつた。――唯、あけ放した窓に近い

部分だけに空の明るみがうすいカーテンに滲んで、かすかな蒼白さが空間にうかんでゐる。

『――そこに、椅子がありますからね、どうぞおかけ下さい！』

彼は闇の中に突つ立つて居る美和子に向つて言つた。左手の壁の角まで歩いていつて電燈のボタンをひねらうとしたが、しかし一瞬間、もや〳〵と湧きあがつて來た感情がボタンに觸れようとする彼の指をあとへひきもどした。――何も彼もおれはこの女に話してしまはなければならない――と、彼は思つた。あたりはひつそりとして居る。部屋の中の闇は次第に彼の視野の中にうすくぼやけて、小さなテーブルを前にしてぢつとうつむいて居る美和子の姿を、動かざる石像のやうにうつしだした。深い秘密がこのほのかな闇によつてまもられてゐるやうであつた。おれは今一つの重大な問題に當面してゐるのだ――といふ感じが新しく彼の心に伸びあがつてきた。それは、まつたくはなればなれになつてゐた二つの心が一つに溶け合はうとする瞬間であつた。彼の頭の中を幾百幾千とも知れぬ言葉の列がおそろしい速さで通りすぎた。――

美和子はうつむいたまゝぢつと眼を瞑ぢてゐた。彼女は何故ともなく眼をひらくことがおそろしかつた。自分を欺いた憎むべき男が眼の前にゐるではないか。自分とこの男とはもう完全に別々のものになつてしまつたのだ、――彼女はつとめて自分の氣持をさういふ考への方にねぢ向けようとしたがしかしそれにもかゝはらず、何か妙にそわ〳〵とした喜び――それは言ひ知れぬ深い愛情の中に身も

魂も溺れこんでゆくやうな——がひとりでに夢のやうな陶醉の中で彼の言葉を彈き返してやりたいやうな、しかし、それにもかゝはらず彼の腕の中に抱しめられてしみ〴〵と泣きたいやうな、たえず撥ね返る烈しい感情のために胸が壓しつぶされさうな氣がするのであつた。

克彦は美和子の髪の毛が闇の中にゆれるのを見詰めてゐたが、しかし不意に一つの衝動が彼の胸を突つ走つた。——彼の兩腕はおのゝくやうに顫へた。新しい情熱が彼を唆しかけた。もう何も言ふことはない、——まつたく何も……おれはこの女を愛してゐるのだ！。

彼の手は何時の間にか美和子の肩に觸れてゐた。（おれは一體何をしようとするのか？）

しかし、さういふ理性のかすかな叫びをおどり越えて、彼の腕は美和子の胸を抱きしめてゐた。

—

8

しかし、美和子は克彦の腕の上に顏を俯せたかと思ふと悲しみがどつとこみあげてきた。長い間こらえぬいてゐた涙が、到頭堰をのりこえてあふれだしたのである。

「——僕は、あなたにたつた一言だけ聞いていたゞきたいんです、僕がどんなにあなたを愛してゐるかと云ふことを……」

克彦は口ごもりながら、まつたくしどろもどろの調子でかう言つてから、そつと女の身體からはなれた。美和子はぐつたりとテーブルの端しにもたれかゝつたが、そのまゝ力なくテーブルの上にのばした兩手で顏を掩ひながら、前よりも烈しく泣きはじめた。

「——今でも、僕はあなたを愛して居ます、いや、前よりも一層強く僕はあなたの幸福を祈つて居るかも知れません——だが、美和子さん、僕にはもうあなたを愛する資格がなくなつてしまつたんです！」

克彦は言葉が胸につまつて、もう何を言ふべきか、——いや、自分が何を言はうとしてゐるかといふことすらもわからなかつた。今は、彼の心には自分をゴマ化さうとする感情は少しも殘つてゐなかつた。唯、一つの眞實が、女のすゝり泣く聲の中から彼の胸に迫つてきた。——お前は傷つてはならないぞ！と誰かゞ強く彼に叫びかけてゐるやうな氣がした。夜風があけ放した窓のカーテンをうごかし、蒼白い星かげの縞は痙攣を起したやうに闇の中にゆれてゐる。

美和子が顏をあげた。涙のあふれた瞳はうつとりと正面の壁を見詰めてゐた。それは克彦の言葉を聽いてゐるといふよりもむしろ深い回想の中をきれぎれにうかぶ美しい夢にうつとりと心を沈めてゐるかのやうであつた。克彦はテーブルの前を往つたり來たりしてゐたが、急に胸の上に組み合せてゐた手をだらりと下にさげながら、

「僕は、何も彼もさらけだしてお話しようと思つてゐるんです」

「でも、わたし」と、美和子は、はじめて克彦の顏をまともに見上げながら言つた。——「わたし何もお聞きしたくないのよ。ほんたうにわたし何とも思つてゐないの」

彼女はもう泣いてゐるのではなかつた。その瞳には憎しみの翳すらもなく、いや、その瞳にはむしろ深い同情をふくんで輝いてゐるのであつた。彼女は、あの月明館の四階で、幾度びとなく自分に接吻しやうとしては躊躇した男の思ひつめた表情を頭の中におもひうかべてゐた。すると、そのときは何の考へもなく聞き捨てゝゐた彼の言葉の一つ〳〵があざやかにしつとりと彼女の頭にからみついてきたのである。彼女はしきりに何か言はうとしては急に口をつぐんだ。口をつぐんだかと思ふと、また何かしら新しく湧いてくる激情のためにもどかしさうに唇をふるはせてゐたがしかし、到頭低い聲でひとりごとのやうにしやべりだした。

「わたし、少しも怨んでなんかゐないことよ、——あんなに可愛がつていたゞいたゞけでわたしどんなに幸福かしれないんですもの、だから、わたしのことなんかでくよくよなさることは少しもないわ」

「すると」

と、克彦は急に大きい聲で叫んだ。——「するとあなたは、もう僕を愛してはゐらつしやらないんですね？」

美和子は、おどろいたやうに眼をあけた。まるで意外だといつたやうに口をすぼませながら——

「わたし、そんなつもりで言つてゐるんぢやないのよ」

彼女は悲しさうに眼をしばたゝきながら言つた。

9

克彦は指にはさんでゐた煙草に火をつけるためにマッチをすつた。そのマッチのかすかな明滅の中に、彼女の横顏の冷たい表情が彼の瞳をかすめたのである。マッチの火が消えると部屋の中はふたゝびもとのうす闇につゝまれた。

「ぢやあ——」と、克彦は美和子を促したてるやうな調子で言葉をつゞけた。——「あなたは僕をゆるして下さるんですね？」

「でも、ゆるすもゆるさないもないことよ、仕方がないんですもの」

「仕方がないんですつて？」

克彦は煙草の吸ひ口をかみしめた。

しかし、美和子は默つてうつむいてしまつた。

「あなたはやつぱり僕の心を誤解してゐるんですよ、――なるほど僕は此部屋に一人で泊つてゐるんぢやないです。だが、その女と僕との關係はあなたが考へるやうなものぢやない。――いゝですか、僕はこんな結果になつてしまはうとは夢にも思つてゐなかつたんですからね、蘇州の宿屋で偶然この女と會つたときは僕の頭の中はあなたのおもひでゞうづまつてゐたのです……」

回想がどよめいてくるにつれて彼の言葉は前後の連絡を失ひかけてゐた。それに、辯解しようとあせればあせるほど、妙に空虛なひゞきだけが殘つた。今、この暗い部屋の中にテーブルをはさんで向ひ合つてゐる自分も美和子も、それ〴〵の感情の上に一定の距離を保つて、きまりきつた臺詞を口にしてゐるやうな氣持だつた。其もどかしさを美和子はすぐ感じたらしい、彼女は冷たく澄みとほつた眼で、闇の中に目まぐろしくうごく克彦の表情を追ひながら、――

「そんなお話を承はつたところで、わたし困るわ、わたしの氣持は前と少しも變らないのよ、今でもわたし昔のやうに先生を幸福にしてあげたいと思つてゐるのよ、でも先生は弱い方なのね。――」

彼女は以前に呼び馴れてゐた調子で「先生」といふ言葉に強いひゞきをもたせて呼んでみた。しかしそれは何とも知れぬ物悲しい感じだつた。

「だが、あなたには未だ、僕の心がほんたうにわかつてゐないんです、僕はあなたに眞實をお話したいと思つてゐるんです」

彼はどぎまぎして狼狽へてゐる自分の心をもはや掩ひかくすことができなかつた。おれの頭はもうすつかり混亂しかけてゐるぞ！――しかし、さういふ意識はます〴〵彼の心から靜かな平定を奪つてしまつた。そのとき、彼の心の混亂を煽り立てるものゝやうに卓上電話のベルが烈しく鳴りひゞいた。克彦はいそいで、その前に立つて受話器を耳にあてがつたが、しかし、その腕は痙攣を起したやうにふるえてゐた。

話はすぐに終つたらしい。――彼は美和子の方を向いて輕く會釋をしたが、その瞬間 美和子がひよいと立ちあがつた。

「わたし今夜はもう失禮するわ、ほんたうはね、わたしもいろ〴〵お話したいことがあるのよ、――だから明日の晩、たぶんまたお伺ひするかも知れないわ」

その聲は、戀人同志といふよりも、何時の間にか決して戀愛に陷ることのない友人同志の間にかはされるあけすけの調子に變つてゐた。それからおよそ五分間の後である。克彦はホテルの入口の階段の上にしよんぼりと立つて電車通りの方へ消えてゆく美和子のうしろ姿の上に深い感情にみちた視線を投げながら、瞬きもせずに見送つてゐた。彼の顏は血の氣を失ひその 唇 は烈しく戰いてゐた。

彼は自分の部屋へは歸らずに、そのまゝ曲りくねつた廊下を何處といふ方向も定めずに歩きまはつた。小さな階段を幾つとなくのぼつたり下りたりした。正面の大きい部屋の前に二三人の西洋人が立つてゐる。克彦がその横を通りすぎようとしたとき、扉があいた。タキシードを着た五六人の若い紳士が出てきた。しかし、彼はその方をちらつと見たゞけで足早に廊下の角を右に折れた。フオックストロットの奏樂が追駈けるやうに彼のうしろからひゞいてきた。——

ホテルの中を一まはりして部屋に歸つたときはもう十時をすぎてゐたが、しかし、部屋の中が暗くひつそりとしてゐるだけに、胸の底に鬱結してゐる感情は急に烈しい騒音となつて高鳴りはじめた。彼は寢臺の上にごろりと横になつたが、しかし五分間も經たぬうちに起きあがつた。起きあがると兩手で頭をおさえながら部屋の中をぐる〳〵と歩きまはつた。美和子の幻像は彼の頭の中に今は片影すらも殘さずにくだけてしまつたのである。そのくだけ散つた破片をひろひあつめようとする氣力も失せて、彼はかすかに星あかりによつて、うすいカーテンの上にたよりなくゆれてゐる自分の影を見詰めてゐるのであつた。風が吹くごとに影は前後にはためいて大きくなつたり小さくなつたりした。彼はバルコンに續く扉にもたれてぢつと眼をとぢた。そのとき、彼の耳に、ゆるやかな樂の音が冷々とする大氣をすべつて聞こえて來たのである。最初それは風に鳴る電線の音のやうにかすれてゐた。しかし、耳をすましてゐると、次第にそれは胡弓のやうなきれ〴〵の哀調をふくんできた。彼はその音に

誘ひこまれるやうにバルコンに出たのである。空は數時間前よりも高く澄んでゐた。そして、樂の音は部屋の中で聞いてゐたときとくらべると一層はつきりと、しかも美しい階調を湛えて響いてくる。間もなく、彼はその音が中庭をへだてゝ向ひ合つてゐる部屋から聞えてくることを知つた。そしてその樂器が正しくギターであることを——。

深くカーテンが垂てゐるので中にゐる人の姿はうかゞひ見るすべもなかつたが、しかし、こんな晩にカーテンをおろして、あの流行はづれの樂器をひそやかにかき鳴らしてゐる人は、つれ〴〵に弄んでゐるといふよりも、何か堪えがたい心の悲しみを。わが手に鳴らす樂器の糸に慰められてゐるやうな氣がするではないか！

克彦は正面のてすりにもたれかゝつて絶え〴〵にひゞいてくるギターの音にしつとりと心を沈めていつた。すると、そのむせび泣く哀音は一刻ごとに彼の胸の中こ沁みるやうにひろがつてくる。落葉を焚く火にも似た過去の夢がとろとろと燃えはじめた。その回想の焔の中から現はれてきたのは上海でわかれたきりの黒上聆介の姿である。すると、彼はあのみぢめな放浪者が月明館の四階の部屋に殘していつた手紙を思ひだした。——君と僕とは同じ運命の線上にある、と言つた彼の言葉を——。その言葉が今は一つの威力をもつて新しくうかびあがつてきたのである。

だがギターの音は高く低く、そのすゝり泣く調子は前よりも一層あざやかに夜風の中に溶けていつた。

第十四章　白燈

1

月の光が森のかげを黑く路上にうつしだしてゐる。夜はもう一時に近い。丘をめぐる郊外の道は無雜作に投げ捨てられた帶のやうに新しく敷いた砂利がうすく月光を反射して、あを白くかゞやいてゐた。——

池上本門寺の裏の深い窪地にある一軒家には幾日ぶりかで電燈のほかけが、赤茶けた雨戸の障子にうつつてゐる。その雨戸があいて南里玄作が帽子をかぶつたまゝ首をつきだしたのである。彼は、窓枠に兩肘をもたせかけて、ときどき遠くの方から聞こえてくる梟の聲に耳をすましてゐたが、しかし急に思ひ出したやうに唾をべつ！と吐き捨てた。それから大きい聲で、久しく見ない愛犬の名前を呼んだ。

「クロ！　クロ！」

すると、しばらく經つてから椽の下から一匹の痩せ犬がのそ〳〵と這ひ出てきたのである。犬はしきりに鼻を鳴らしながら、なつかしさうに主人の顏を悲しげに見あげた。だが、しかし長い間の飢のために見るかげもなく、痩せおとろへてしまつてゐるので、勢ひよく彼の顏を目がけてとびかゝらうとしてはあぶなくすべりおちてしまつた。それから地べたに兩脚をのばして唸るやうな聲で吠えたて

たがしかしその聲にも力がなかつた。南里はその哀れな姿をぢつと見まもつてゐたが、もう一度べつ！と唾を吐いてから、いそいで雨戸をしめた。だが、彼の洋服姿はそれから二分と經たぬうちにすぐに表の格子戸のそとにあらはれた。

「クロ！　クロ！」

彼はしきりに犬の名前を呼びながら松林の見える高い丘につゞく坂をのぼつていつた。のそ〳〵と力なくついてくる犬の方をふりかへつては、ときゞ〳〵思ひだしたやうに口笛を鳴らしながら……。

犬の影と人間の影とがたよりなくもつれあひながら白い砂利道の上をうごいて行く。低い石垣にそつて坂の上までくると、南里はひよいと腰をかゞめた。その痩せ腕が前にのびて、ぎゆつと犬の身體を抱しめて居た。

「痩せたな――クロ！貴様は何故あんなところで何時までも動かないで居るんだ、何故もつと早く逃げ出さないんだ、まるで貴様はおれの女房みたいな奴だな！」

南里は酒臭い息を吐いて、はげしく犬に頬づりをした。――犬はしきりに兩脚を彼の腕の上にのせて、それはちやうど女が姿態をつくるときのやうに輕く身體をよぢらせたが、急に彼の腕をくゞりぬけて坂の下の方にむかつて身構へをはじめた。明かにそれは何者かの近づいてきたのを感じたらしい様子であつた。

「馬鹿、もうそんな番犬らしい本能は捨てしまへよ、クロ！」

南里は蹌踉として立ちあがつた丘の下に深い樹立の闇をやぶつて文化住宅の燈火が小さくうかんでゐる。斷崖にさえぎられた右側の森の上の方だけ空が明るくかゞやいてゐるのはその下にひろがつてゐる大森の街の灯がうつゝてゐるからであらう。遠くの方で梟が啼いた。そのとき、一人の男が、深い雜木林にかこまれた道を本門寺の裏口の方から歩いてきたのである。その姿が坂の下にぼつかりとあらはれた。洋服を着たその男は、ときゞ〳〵あたりをふりかへつては何か考へこむやうな恰格をしてゐたが、やがて、坂の上にゐる彼の姿をみとめたらしく、大股に靴の音を高く砂利の上に殘してのほつてきた。しかし、坂の中途までくると立ちどまつた。

2

「クロ」が今にもとびかゝる氣勢を示しながら吠えたてた。

その男があわてゝ身體を斜にうごかしたので月光の中に横顔がくつきりとうかびあがつた。南里は思はずどまぎとしてわれ知らず前へ歩きだしてゐた。

「荒川ぢやないか――君は？」

言葉がひとりでに彼の唇からあふれ出て來た。――「どうしたんだ、一體？」

「おゝ……」と、そのとき、克彦はうめくやうな聲をあげた。彼はもう一度南里の顏の上に深い感慨をこめた視線を投げながらいそいで帽子をとつた。その姿を、南里はすぐに冷やかな眼で彈きかへした。——「何時、歸つてきたんだい？」

「もう今日で一週間になるよ、今夜は君の家がわからなくてね、だから、そのへんをうろついてゐるうちに誰かこの坂の上にゐる樣子だから、たづねてみやうと思つてのぼつてきたんだが……」

「いや、おれもおどろいたね。——しかし、まあいゝさ、何よりも君が無事で歸つてきたといふことは」

「ところが」と、克彦は自嘲的な笑ひをうかべながら急に聲の調子をおとして、

「少しも無事ぢやあないんだ。今のおれの心はまつたく廢人同樣さ僕はこれからの生きる道について君の判斷を乞はうと思つてやつてきたんだ！」

「生きる道だつて、——おや、おや、君は今でもまだそんなことを考へて居るのかい、そんなことにおれは關りをもちたくはないよ、生きる道が知りたかつたら救世軍へでも行くさ」

「おい、——もうそんな風に言葉尻をつかまへるのはよしてくれよ僕はもつと、もつと重大な問題に當面して居るんだからね、今夜のうちにおれはどつちか決めてしまはなきやならないんだ！」

「どつちかといふと——？」

「おれは自殺しやうか、しないかといふ考へに迷つてゐるんだ！」

「それを僕に相談しに來たといふわけか、自殺したかつたら勝手にするさ、他人の勸告で思ひとまるやな程度の感情なら最初から持たないに越したことはないぞ」

「君は醉つてゐるね——南里？」

「さうかもしれないな、すくなくとも君が人生のセンチメンタリズムに醉ぱらつてゐる程度にはねぢやあ兎に角、僕は、自殺しかけてゐる人間として君に敬意を表することにしやう」

彼は克彦の肩を輕く撫でながら言つた。しかし、彼の瞳には言葉で示すことのできない深い友情が輝いてゐた。彼は克彦の肩から手をはなすと、先に立つて丘の上の方へあるきだした。「おい！この上までのぼつてみやう！」

克彦もあとからついていつたがしかしそのとき遠い街の方からかすかなひゞきが傳はつてくると彼はあわてゝ立ちどまつた。

「何だい——あれは？」

「汽車さ、あの音を聞くとおれは黑上晗介をおもひだすよ、君も上海で會つたつてね、あいつさ——あいつは遠くからあの音にぢつと耳を澄ましてゐると自殺したくなるつて何時も口癖のやうに言つてゐたよ、ところがこのごろはまるで消息不明だからね、ことによると……」

南里は嘲けるやうな調子で言つた。――「ことによると註文通り鐵道往生をしたかも知れないね」
丘の上にのぼると二人は削り立つたやうな斷崖のはしにならんで腰をおろした。

3

「ぢやあ、黑上君はほんたうに死んでしまつたのかな、――ほんたうに」と克彥は夜露にぬれた雜草の上に寢そべつて呟くやうに言つた。
「そんなことがわかるものか、多分さうだらうと思ふだけのことだ」
「いや、僕もあの人は生きてゐないと思ふ、すくなくともあの人は生きてゐる理由をまつたく失つてしまつてゐるからね」
「ところが――あの男は君のやうに、生死の問題を他人に相談しやうとはしないからね、あいつは無警告でごろりとゆくやつだ、それだけにおれはあいつがおそろしいよ、」
南里は帽子をぬぎ、亂れた髪をかきあげながら言葉をつゞけた。
「――だからさ、君の境遇が今、どんなにせつぱ詰まつて居るか知らないがね、君が苦しさぎれに自殺したところで、同じやうな人間と同じやうな境遇がわれ〳〵の人生から姿をくらましてしまふわけぢやないからね、――いゝかね、君が若自殺することを君の運命に對する最後の反抗だと考へて居

るとしたらそいつは大間違ひだ、われわれの生存のごときは大きな時代の流れの中に居る一雫の水さ苦しみも喜びもすべてその流れの中に、いや、流れとゝもにあるのだといふことを考へたまへ、……
……だから、その苦しみを生きぬけるところにのみ君の藝術があるんだといふことを――」
「それはわかつてゐるさ、――ところが今の僕には藝術に對する感激なぞは爪の垢ほども殘つてゐないんだからね、僕は唯自分の運命がおそろしいよ、――だから若僕の手に一挺のピストルさへあつたら僕は立ちどころに自分の心臟を貫ぬいてみせるね、それはいふまでもなく自分をおびやかしてゐる運命と一騎打の勝負をすることだから……」
「おや、おや、――いよいよもつて君は途方もない馬鹿野郎だねそんなにピストルが必要なら」と南里は吸ひさしの煙草を暗い斷崖の下に投げ捨てゝから左手を上着のポケットの中へ突つこんで、もう一度、克彥の横顏の上に無氣味の視線を投げた。
「此處にあるぜ、ちやんと實彈が塡めてあるんだ！」
それは低いが、しかし高い響きのこもつた聲だつた。彼の掌の上にはたしかに一挺のピストルがさながらそれは深い運命の神秘を象徴するかのやうに蒼黑くすみとほつた色を月光に反射してゐるではないか！
「君が心臟を貫いたつて、君の息の根がとまるだけのことだ、――哀れな君のロマンチシズムが終

りを告げるだけのことだ、運命はほら、あそこに輝いてゐる月のやうなものさ、古ぼけた君の夢にふさわしい月のやうなものさ、實を言へば僕もこの數日間、自殺の方法を考へて歩いてゐたんだ、ところがね、この世の中には生きるに價することがないと同じやうに自殺に價するやうなことはまつたく何も無いよ、だから、おれは、このぐうたらな生存をつゞけるために歸つてきたんだ！」

南里はピストルを右の手に持ちかへた。それからゆつくりと立ちあがつた。克彦はぢつとしてうつむいてゐたがやがてしづかに顔をあげた。その眼には涙が光つてゐた。

「おい——荒川！しつかり胸に手をあてゝゐろ！今からおれが貴樣の心臟を貫いてみせるから！」

ほがらかな聲で叫んだとみるうちに南里は足をうしろへひいた。銃口を空の一角に向つてねらひをさだめたのである。

「さあ、見てゐろ！今にあの月が微塵に碎けて君の頭の上に落ちてくるから！」

寂莫たる空の壁をやぶつて轟然たるひゞきが起つた。一瞬間、克彦は雜草の上にうつぷしてしまつた。

4

克彦は思はず眼がくらくらつとした。彼は銃口から白い煙の線がすうつと彼の前を通りすぎたのを

かんじた。音響はすぐにしづまつたが、しかし空はまだ響の餘波のためにふるえてゐた。遠くの方で犬が一齊に吠えだした。克彦の胸は一瞬間、うつろになつてしまつたやうな氣がした。はりつめた氷が溶けるやうに彼の心の底に淀んでゐる憂鬱はぢり〳〵と消えて、妙にはれ〳〵と明るくなつた。彼は何ものかに感謝したい氣持になつてゐた。冴え〳〵と澄んだ夜空の下に、あらゆるものが靜かに美しく見えた。無數の丘がなだらかな起伏を示して彼の眼の前にひろがつてゐる。遠い森は白絹のやうな靄につゝまれ、ところ〴〵に電燈のほかげが小さく、ひそやかに、さながらそれは、そこの森かげに家を建てゝ住んでゐるひと〴〵の安らかな生活をまもるかのやうにきら〳〵と輝いてゐる。おゝ！地上のあらゆるところに人間の生活がさま〴〵なすがたを示してうかんでゐるのだ。——彼はこのやうに美しい風景を、うまれてから一度も見たことが無いやうな氣がするのである。頭の上では松の老木の梢がおごそかなひゞきをこめて鳴つてゐた。そのとき放心の中をさまよふやうなきもちで丘の下にひらかれた人生の眺望にうつとりとしてゐる克彦の耳の中に、突然南里のほがらかな笑ひ聲が割れるやうに落ちてきた。

「——どうだい、もし入用なら未だ一發殘つてゐるぜ！」

南里はピストルを握りしめた右手をだらりと下げてゐた。彼は先刻と同じ位置に傲然として立つてゐるのであつた。妙な感情が克彦の胸の底を突つ走つた。彼はそのまゝ南里の足元にひれふしてしま

ひたいやうなきもちだつた。

「――このピストルはね、北野から借りた品さ、あいつはこのピストルをおれに貸してくれた次の日から行方をくらましてしまつたんだが――多分、今ごろはもう何處かでつかまつてゐるかも知れないね」

「北野？」と克彦は思はず驚きの叫びをあげた。なるほど、そのピストルには見覺えがあつた。彼が上海にゐるころ、變裝してやつてきた北野が彼に保管を託したその同じピストルにちがひなかつた。――刻々に近づいてくる戰亂の警報におびやかされてゐる上海の春の街を、あのピストルをポケットの中に握りしめて黄浦江のほとりをうろつきまはつた自分の姿が生々と彼の頭にうかんできた。

さうだ、――あのとき、何度自分は銃口を眉間にあてがはうとしたことであらう、その同じピストルが今、南里の手に握りしめられてゐるではないか！

「僕は少しも知らなかつた、すると、今、北野の身邊には非常な危險が迫つてゐるわけなんだね？」

「危險は常に迫つてゐるらしいね、あの男は常に戰つてゐるんだからな、」と、南里は突慳鈍にさう言つてから、くるりとうしろを向いた。

「さあ、少し歩かう、われ〳〵が、かういふセンチメンタルな遊びにふけつてゐる間に世の中には

實際何が起つてゐるかも知れないんだぜ、運命は君の中にあるんぢやなくて君が運命の中にあるんぢやないか、――だからわれ〳〵は絶えず運命とゝもに動くだけの覺悟が必要だといふのだ、まつたくおれたちにしたところで明日の朝までに何が起るかわかるものか、そのわからない明日を信ずるだけの勇氣がなければむしろ、ほんたうにくたばる方がいゝのぢやないか！」

南里の聲は何時になくしんみりしてゐた。そしてまつたく彼の言ふとほりであつた。何故かといつて世の中には異常な事變が起りつゝあつたから。同じ夜、月岡燦珠の演じたストリンドベルヒの「稻妻」の成功は劇壇に異常なセンセーションをまき起した。東京刑務所の未決監では一人の獄囚が着物をさいてつくつた紐を鐵格子にぶら下けて首をくゝつて死んでゐたのはその同じ夜であつたが月光が蒼白く、やつれはてた彼の横顔の上に暗い翳をなげてゐた。それが悲運の中に半生を埋めた安達龍平の最期であるとしても、彼を支配してゐた運命が終りを告げたのではない。哀れな安達龍平よ！其ことがわかつたのは夜明け近くであつたが、しかし、無邊際をつらぬく人生の流れはやがて時ならずして彼の屍を遠い過去の海へ運んでしまふであらう。偶然は鎖のやうにつらなつて現はれてくる。天城の峻嶺を越えて山の溫泉宿に身をひそめた北野一郎の所在が官憲につきとめられたのも同じ夜の默時間を隔てぬ前のことであつた。そして、見よ！今、大森郊外に薄明りの朝が訪れやうとするとき、この二つの特種を翌日の夕刊にならべるために各新聞社の社會部の机の上では卓上電話が氣魂しく鳴

りひゞいてゐるのである。

5

「もう何時頃になるかな、——君は時計を持つてゐないかい？」と、南里は坂の上に立ちどまつてあとからくる克彦の方をふりかへつた。

「——二時少し前だね」

克彦は腕時計をすかすやうにして見てゐたが、しかし急に元の元氣のいゝ調子で、

「どうだらう、——朝まで僕のつきあひをして話をしてくれないかな」

「いゝとも、——もう一時間もたつと、そろ〳〵夜があけるよ、僕もどうせ近いうちにこの家はひき拂ふつもりでゐるからね、兎に角久しぶりで僕の家まで行かう！」

南里は何時になく素直な聲で言つた。——「ことによると、まだ押入の中にウヰスキーが少し殘つてゐるかも知れないんだ」

「そいつはありがたいね、僕もこのごろはずゐぶん飲めるんだぜ上海で修行してきたからね」克彦は冷きつた夜風をぐつと腹の底まで吸ひこみながら、生氣にみちたすが〳〵しさが全身に波うつてくるのをかんじた。大地は寂莫として靜まりかへつてゐたが、月のせいか、あたりは晝のやうに明るかつた。小さい丘の下をうねつてゐる道の曲り角を照してゐる電燈の光が一瞬間、克彦の心にみすぼらしい感じをあたへたが、しかし彼の胸に澎湃としてみなぎつてきた生々とした感情がたちまちその味氣なさをうち消した。彼は力强く砂利を踏みつけながら歩いた。

「ところで——」と、南里が坂の中ほどまできたところで立ちどまつた。

「——どうするつもりなんだい君はこれから？」

「どうするつて？」

「何をして暮すつもりなんだい」

「そいつはまだ見當がつかないね。——しかし何をしたつて生きてゆけるよ。さういふ生活の方法について考へるよりも前に僕はすつかり過去の亡靈と緣を切つてしまひたいと思つてゐるんだ」

「亡靈だつて——？」

「いや、君にはね、未だ話をしてゐないんだが僕はこの二タ月あまり一人の女といつしよに暮してゐるんだ、上海あたりでは楊子江夫人といふ異名で通つてゐる有名な妖婦さ、それが色魔で、阿片溺愛者で、おまけに金持ちときてゐるんだからね」

「ぢやあ、まるで誂へ向きだな、その女と二人で日本へ歸つてきたわけだね」

「さうさ、——今もいつしよに帝國ホテルへ泊つてゐるといふわけさ」

「帝國ホテル？――ほう、一口にいふと君はそいつの男妾といふわけだな」

「さうかもしれないね、――いやさうだ、たしかに、……僕はその女とめぐり合つたといふことに對してすら小さな運命を感じなければ居られないほどの弱蟲だつたからね、つまり黑上の宿命論が亡靈のやうにおれを追つ駈けてきたんだ――あの男の蒼ざめた顏が何時でもおれの頭の中で笑つてゐるんだからね、これが貴樣の運命だ！とかうきめつけられると、おれは何時もへな〳〵としてまゐつてしまふんだ」

克彥は鬱結してゐた感情を一時に吐きだしたいやうな氣持だつた。しかし、彼の言葉が次第に明るく晴れてくるにつれて南里の顏には一種名狀することのできない憂鬱な、――といふよりもむしろ何かけつそりとした悲しげな表情がうかんできた。

6

「しかしだね」と、南里が不意に克彥の言葉を遮つた。――「要するにわれ〳〵が黑上と同型の人間であるといふことに變りはないよ。あの男こわれ！〳〵との相違は、人生の軌道の相違ぢやなくて軌道をすべる速力の相違だ。――つまりあの男を急行列車だとすれば、われ〳〵はトロッコだ」

「さうかも知れないな、――だがそれはさうと、あの男はほんたうにもう世の中にゐないだらうか」

「生きてゐるか死んでゐるかといふ意味ならむろん、あの男は生きてゐるさ、自殺したかしないかといふことは問題ぢやない、――あいつは常に生きてゐるよ、あの男の投げていつた影の存在は、たぶんおれたちの一生よりも長いからな、」

「さうだ！」と、克彥は低い聲で叫んだ。――「あの男はたしかに生きてゐる、僕は心の中に何時もあの男の聲が聞えるやうな氣がする」

「いゝかね、君は黑上の亡靈に反抗する理由が少しも無いといふことを考へたまへ、あいつは一生涯、大きな運命に反抗しつゞけて生きてきた男だ、あいつは一生を棒にふつて素晴らしい戰ひをつゞけてきたのだ、だから、君は黑上の殘していつた仕事を完成することに、むしろ一つの義務を感ずべきだ――」

二人はもう何時の間にか坂を下りきつてゐるのであつた。兩側の雜木林のかげが黑く路上を掩つてゐるのである。神秘な幻想は深い闇の中から湧いてきた。克彥は自分の心の中に異常な變化が起りつゝあることを感じた。彼は闇の中に、ぢつと瞳をすえて南里の瞳を探し求めながら――

「ぢやあ、僕は一體、何をしたらいゝんだい？」

「――戀愛をしたまへ、――黑上と君とが、同じ運命の方向を辿つて居るとすればだね、君は珠燦

を愛することによつてのみ救はれるのだ。あの男の亡靈から逃れる道はこのほかにはないよ！」

南里の聲は顫へて居たが、しかし、はつきりして居た。克彦の頭の中は不意にさま〳〵な想念が入りみだれて、おそろしい速さで動きはじめた。

「ねえ、――今こそ君が立ちなほるときだ、僕は確信をもつてこれだけのことを言ひ得るよ、あの女は君を愛してゐる、――ねえ、それだけで充分ぢやないか、僕はあの女の價値を論じてゐるんぢやないぜ例へばだ、――あの女が女優の月岡燦珠ぢやなくて、一匹の犬であつたつていゝ、今まで君の間違ひは何時も愛情の算盤を彈きながら戀愛をしてゐたといふことだ、しかし、黑上はもつと眞實なもつと正しい方法で女を愛してゐたからね、――」

しかし、家の前までくると、南里は急に言葉の調子を變へた。

「もう、そろ〳〵夜があけるからね、椽側に腰をかけて話をしやうぜ」

彼は先に立つて庭に廻り、椽側の戸をあけた。それから靴をぬいで部屋の中へはいつていつたが、しかし、すぐにウヰスキーの瓶をさげて出きてた。彼は克彦のそばにどつかりと胡坐をかいだ。――そのとき「クロ」が鼻をしきりに鳴らしなから久しぶりで歸つてきた主人の顏を不思議さうに見まもつてゐた。月光は鈍く、風には朝の爽かさがあつた。

電燈の光が、垢塵をあびて雜然とゝりみだされたまゝになつてゐる部屋の中を照してゐた。古い壁の臭が流れてきた。それはもう久しい間人の住んだことのない荒れはてた古寺は思はせた。

「ひどいね――これは」

克彦はウヰスキーのグラスをそつと唇から離した。「そこにゐる君の姿はまるで山賊だね」彼の言ふとほりだつた。窪んだ眼、痩せおちた頰を掩ふざら〳〵の無精髯、――そこにどつしりと胡坐をかいてゐる南里の姿を見よ！若彼が洋服のかはりに褞袍を着てゐたとしたら、いかに此無氣味な、荒涼たる部屋の空氣に深い調和を示すことであらう。

「山賊か、――はつ、はつ、はついや、おれも今に山賊にでもなるよりほかに生活の道がなくなるかも知れないね」

二人は顏を見合せて笑つた。ウヰスキーの醉ひが空腹に沁みてゆくやうに、無言のうちに二つの感情が溶けていつた。しかし、克彦はすぐに深い溜息をついて、黑々と空をくぎる遠い森を眺めながら樂しげな叫びをあげた。

「實に偶然だね、去年僕が上海へゆくときにこの同じ風景を前にして妙な感慨を覺えたものだが、

——あのときはまつたく身體中の力が抜けてゆくやうな氣持だつた、それにあのときは梟が啼いてゐたね、あの聲がまた膓へ沁みるやうだつたぜ！」

「梟は今でも啼いてゐるよ、——偶然と言へば偶然にちがひないが、しかし、かういふところにも僕は人生の必然を感ずるね、何も彼も必然ぢやないか、あのときの君が絶望的な氣持になつて日本をはなれていつたことも、今、君が新しく飛躍しやうとしてゐることも——、それを偶然と感ずるのは何時も責任を自分以外のところへ持つてゆかうとする君の卑怯さのためだ、——で、どうだい、月岡燦珠に對する君の氣持は？」

言葉だけ妙なとげとげしさを帶びてゐたがしかし南里の顏には、彼の心の和さを示すところの一種のゆるやかさがあらはれてゐた。

「——さあ、さう急に何とも返事が出來ないがね、しかし、兎に角僕は會つてみるよ、あの女に對して少しも不愉快な感情は殘つてゐないからね」

「ぢやあ、——夜があけたらすぐに出かけたらどうだ！」

「何處へ？」

「燦珠のところへさ——何でも思ひ立つた時に決行することだ」

「ところがね、おれにはほかにゆくべきところがあるんだ——そのことが今はじめてわかつたよ」

と克彥は椽側から腰をうかせながらさう言つたが、しかしすぐに上着の塵をはたいて立あがつた。

「さうかい、——どつちでも君の勝手にすることさ」

「それで明日の晩、もう一度君に會ひたいと思ふんだ、どうだらう——七時か八時頃に、きつと此處へやつてくるから待つてゐてくれないだらうかな」

「あゝいゝとも」

何時になく穩かな調子でさう言つたが、しかし南里は急に顏をそむけた。それから思ひ出したやうに笑ひながら、——

「少し金があつたら置いていつてくれよ、こいつに久しぶりでうんと御馳走してやりたいからね」

南里は椽側に首をもたせかけてゐる「クロ」の頭を撫でた。もうすつかり夜があけてゐた。雲は遠い森の梢を紺碧に染め、光は高原の一角から流れだした。

8

「ぢやあ、きつと待つてゐてくれたまへね」

克彥は南里に一枚の紙幣をわたしてしまつてから帽子を冠つた。

「さよなら」

「さよなら」

低い垣根を越えて坂をおりてゆく克彦のうしろ姿の上に、家の前にある街燈の光がうすくぼやけてゐた。彼は曲り角までいつてうしろをふりかへつたが椽側に立つてゐる南里と顏を見合せると、うれしさうに帽子をふつてみせた。

南里は、椽側に頰杖をついてころり〻横になつた。彼は克彦の靴音にぢつと耳をすましてゐたが、しかしその音はすぐに消えてしまつた。そして、入れちがひに今眼を醒ましたばかりの街の雜音が遠い空をすべつて流れてきた。騷がしい音響の波は一刻ごとに高まつていつた。まだ朝日は姿をあらはしてはゐなかつたが、しかし雲の色は非常な速さで變つていつた。變るごとに明るい輝やきが加はつてきた。

「――さて、おれはこれから何をするのか?」

彼はひとりごとのやうに呟きながらごろりと仰向けに寢そべつた。彼の頭には北野の姿がうかんだ。大きいうねりを示してどよめいてゐる時代の波を拔手をきつて泳いでゆく彼の姿が……。

南里は眼を瞑ぢた。しかし眼を瞑ぢると妙にふわ〳〵とした綿のやうなものが胸の上に垂れさがつてきた。それは非常に短い時間であつたが、眼まぐるしい速さで過去の記憶が一聯の繪卷物のやうにずる〳〵とひろがつていつた。すべてが空虛であつた。卅餘年の生涯が全く無價値でうすぎたなく思

はれた。おびやかすやうに、がうがうと高鳴りながら、あとからあとからと殺到してくる新しい時代の流れのために何時の間にか彼の存在は彈きとばされてしまつてゐた。今や、彼の足跡は何處にも殘つてはゐなかつた。だが、これでいゝのだ、――と、彼は思つた。彼の頭の中には高い山の絕嶺から削り立つたやうな岩角をつたつてころがり落ちてゆく自分の姿が見えてきた。谷底は深く眞つ暗である。いかなる力にもおれは支へられてはならない。おれは唯、まつしぐらに落ちてゆかなければならないのだ!

しかし、不思議に彼の心には暗鬱な絕望感は影すらもなかつた。人生の大河は悠揚として流れてゐる。水面をいろどる小さな愛慾の波紋をうかばせて美しく生々と流れてゐる。

彼はそのまゝ、うと〳〵と眠つた。淺い眠りであつた。朦朧とうすれた、とりこめのない夢の中で誰れかゞしきりに自分を呼んでゐる。眼がひとりでに醒めた。「クロ」が垣根の下にうづくまつて悲しさうに唸つてゐた。

「クロ! クロ!」

彼は起き直つて犬の方を見たがしかし「クロ」はうらめしさうに彼の姿を見たゞけで決して近づいて來やうとはしなかつた。

「おい、――クロ、お前とも、もうおわかれだ、今日はうんと御馳走してやるぞ!」

南里は庭におりて、犬に近づいていつた。若葉に反射する夏の陽ざしが眠の足らぬ眼にとけとけしく泌みてきた。

9

一睡のあとで南里は「クロ」をつれて、下の街へ出ていつた。しかし、彼がひとかゝへの荷物を小脇にしてかへつてきたのは午少し前だつた。新聞紙にくるんだ荷物の中から出てきたのは、牛肉、罐詰、パン、それに酒の四合瓶が一本あつた。椽側にもちだされた七輪の上には久しぶりに大きな薬罐がかけられた。さゝやかなわかれの饗宴がすぐにはじまつたのである。十二時を告げる工場の汽笛が大空に高い反響を殘して聞こえてきた。

「さあ、——君の健康のために一杯飲み乾さうぢやないか、わが情人よ、君はもう年をとつてゐるから新しい飼主を見つけるわけにもゆくまい、僕と同じやうに野良犬らしい一生を終ることだ、何處かの椽の下で君がくたばるころには僕もたぶん君と同じやうに野たれ死をしてゐるからね、はゝ、はゝ、は」

彼は「クロ」の頭を撫でながら言つた。「クロ」は前脚を彼の膝の上にのせてゐたがしかし悲しさうに鼻を鳴らした。空には白い雲の層が山脈のやうにつらなつてゐた。彼は痩せた犬の身體を膝の上に

抱きあげた。それから深い愛撫をこめて、ひよろ長い胴をさすつてやつた。

食事が終ると彼は「クロ」をつれて、郊外の道を歩きまはつた。しかし、その日の夕方、犬をつれた彼の姿が停車場通りの雑踏の中にあらはれた。

「さあ、——おれは東京へ行つてくるからね、君はひとりで歸るんだ、今夜もう一度君に會へるかも知れないがね、若歸らなかつたらこれでもうおわかれだ」

停車場の石段の上にしやがんで、犬の頭をもう一ぺん撫でゝやつてから彼の姿は改札口を通りぬけブリッヂの方へ消えていつた。

その夜——十時をすぎてから、溜池の通りを南里玄作が蹌踉として歩いてゐた。彼は月岡燦珠の家の前でしばらく立ちどまつてゐたが、やがて、音のしないやうに潜り戸をあけた。

樹立の綠は空の星あかりの中に燃えるやうに輝き、何處からともなく仄かなかほりが流れてきた。彼は敷石の道をひそやかに踏んで、燦珠の部屋の窓の前の植込のかげに身をかくした。

窓はあいてゐたが、レースのカーテンがおろしてあつた。明るい電燈の光りは白いカーテンに泌みて、中にゐる二人の人間の影がその上に黒くうかんでゐる。——肩から上だけの輪廓しか見えないけれども、テーブルをはさんで向ひ合つてゐる二人の男女の姿がはつきりと彼の頭に描きだされてきたカーテンのうつる影法師は絶え間なく微動してゐた。男は煙草をすつてゐるのであらう、煙がゆらゆ

らほのかな線をつくつてのぼつてゐるのである。

彼はぢつとして耳をすました。よほど低い聲で話してゐるらしい誰の聲であるかといふことはまるで聞きわけることができなかつたが、しかし彼はすぐにそこにゐる人間が誰であるかといふことを感じた。女はいふまでもなく燦珠であるが、男は？

男は荒川克彦にちがひないと彼は思つた。

すると、かすかな微笑が彼の唇にうかんできたのである。すべてのことが彼の註文どほりになつたのだ。——彼はしかし、もう一度自分の感じをたしかめるために、植込の間をぬけて窓に近づいていつた。一瞬間であつた。——彼の表情は硬直したやうになり、それから目まぐるしい速さで變つていつた。

10

部屋の中から男の笑ひ聲が聞こえてきたのである。だがそれは克彦の聲ではなかつた。しかもそれは、ほがらかな笑ひ聲ではなく何處かに毒々しい調子をふくんだ、せゝら笑ひであつた。南里はもう一歩前に進んで、窓とすれ〳〵によりそひながらぢつと耳を澄した。それきり話聲はぱつたりと途絶えてしまつた。

「でも、わたし……」と、そのとき、女の聲がかすれるやうな顫へをおびてひゞいてきたのである——「わるく思はないで下さいね、わたし、ほんたうに結婚なぞといふことを考へたことはないのよ、わたし、自分で自分の氣象がどんなに不幸なのか知つてゐるのよ、わたしを誤解しないでね、——ほんたうにあなたにはどんなに感謝してゐるか知れないわ」

「僕はあなたに少しも感謝なんかされたくないんです、感謝……あゝ何といふ厭な言葉だ、感謝されるより僕はむしろ憎まれたほうがいゝ、——燦珠さん、あなたはまるで僕を理解してはくれないんですね、僕はあなたと形式的な結婚をすることなんか少しも望んぢやゐないんですよ、僕が結婚を申込んだのは若あなたが必要ならば結婚だつて辭さないといふ意味のことを言つたんだ、僕はあなたを愛してゐます、——あと四日で僕は日本を去らなければならないんです、この貪えきらない感情を殘して日本を去ることは僕にはとても堪えられない、あゝ」

カーテンにうつゝてゐる男の影が慌しく前にくづれたのである。南里はそこにゐる男が仁科であることを感じた。彼は妙に氣が抜けたやうな氣持になつたが、しかしある距離を隔てゝ聞いてゐると顏の見えないせいか、あの輕蔑すべき仁科重夫の聲にすらも彼は何とも知れず惻々とせまる眞情を感じないではゐられなかつた。はげしい感情の誇張を示した仁科の言葉の、一つ〳〵にも眞實をもつて相手にぶつかつてゆく生一本な調子が殘つてゐた。

一匹の蚊が彼の鼻先にとまつた。南里は右手でひよいと追ひ拂はうとしたが、そのとたんにあぶなく前にのめりかゝつたので彼は急いで元の樹かげに身を忍ばせた。

不意にすゝり泣く聲が聞えてきたのである。仁科の立ちあがる姿がカーテンにうつゝた。

「どうしたんです、燦珠さん！あなたは何が悲しいんです？」

小さな羽蟲が到頭、南里の鼻の穴へとびこんだ。——彼は思はず咳をした。こつそり息をころしたつもりだつたが案外大きな音がした。南里はそのまゝ二三歩うしろへ退いてゐた。樹立の枝が彼の身體と擦れ合ふごとにざわ〳〵と鳴つた。……

部屋の中はふたゝびひつそりとなつた。しかし彼はカーテンが左右にひらかれるのを見たのである明るい電燈のほかげが流れてきた。燦珠の顏と、仁科の顏とが二つならんで窓框の上にあらはれたのである。燦珠の眼は極度に不安のために顫へてゐた。おど〳〵と氣ぜわしさうに瞬きながら深い樹立の闇を一心に見詰めてゐた。そのとき、何時の間にか仁科の腕は燦珠の肩を抱えてゐるのであつた。

「何でもないですよ、こんなところに誰もゐる筈が無いぢやないですか」

「でも、たしかに咳ばらひをする聲が聞こえたのよ」

「そんな莫迦な——風の音でせう」

しかし、ちやうどそのとき坂をのぼつてきた一臺の自動車が門の前でとまつたのである。自動車の

中から二人の男女がいそ〳〵と出てきた。——轍の音はまだ氣魂しく鳴りひゞいてゐた。しかし、藪蚊は前よりも一層はげしく南里の顏に向つて襲撃してきた。

11

南里は潜り戸のあく音を聞いたそれから、敷石の上をつたつてゆつたりとした靴の音と、つゝましやかな木履の音とが近づいてきた。

あたりが急に元の暗さにかへつた。カーテンがおろされたのだ。——うす闇をかすめて黑くうきだした二人の男女の姿が南里の眼の前を通りすぎた。

男が女を庇ふやうにして窓から一間ほど手前のところで立ちどまるのが見えた。それからすぐに右に廻つて扉をこつこつと敲く音が聞こえてきた。

しかし、それにしてもおれは一體何のためにこんなところに立つてゐるのだ、——南里はこの樹立の中に身をひそませてゐる自分の姿を新しく頭に描いたのである。馬鹿々々しいといふよりも以上にその姿は何と無恰好で滑稽に見えることか。

すべてのことが片つぱしから彼の目算からはづれてしまつたのである。彼は何か大きい聲で怒鳴りたい衝動を感じてきた。しかし、次の瞬間、今入つてきた男が誰であるかといふこと、それから、こ

の二人の新しい闖入者のために、部屋の中にやうやく展開しはじめたばかりの戀愛の場面にどういふ變化が起るか、といふことが彼の心にすくなからず好奇の情を喚り立たせたのである、すると彼はもう自分をすつかり人生の道化役者にしてしまふことに滿足を覺えはじめた。そこで窓に近づくために彼は樹立の中からよろ〳〵と這ひ出してきたのである。だが、部屋の中は非常に靜かだつた。その靜けさをやぶつて鋭い透明な男の聲が洩れてきた。

「――僕はあなたの藝術を祝福するために來たんですよ、不快な過去の記憶を蹂躙して新しくあなたと友人になるために……」

それから先の聲は低いためにはつきりと聽きとれなかつたが、南里はわれ知らずどきつとした。彼は危く聲を立てるところだつた。今、部屋の中でしやべつてゐるのは荒川克彦にちがひなかつたからしてみると、――妄想が彼の頭の中に渦のやうに現はれてきた――事件は彼の豫想とはまつたく反對の方向に向つて發展していつたらしい。すると、たしかに克彦と一所にはいつてきた女は彼が支那からつれてきた阿片溺愛者にちがひない。おや、おや――これはいよ〳〵道化芝居にふさわしい場面になつてきたぞ、――と彼は思つた。燦珠が何かしやべりだしたが、しかしその聲はすぐにほがらかな笑ひ聲に變つた。雲行は少しも險惡にならずに、偶然から偶然を追つて、茶番狂言はひとりでに進行してゆくらしい。けれども、風を入れるためにカーテンがすぐにひらかれた。それはちやうど新し

い幕があいて舞臺の全景が觀客の前に現はれるやうに――

四つの顏が一つのテーブルをかこんでゐるのである。燦珠と仁科とは前と同じ位置に向ひ合つて腰をかけ、それから棚の上の鏡臺をうしろにして二人の間に克彦が立つてゐる。そして見よ！更に意想外なことには克彦の横に一人の少女がぢつとうつむいて何か考へこむやうな恰好をしてゐるではないか。少女が顏をあげたとき南里はそれが美和子であることを知つた。すると電光のごとく一つの考えが南里の頭をかすめた。すべての疑問がするすると解けてきた。克彦の顏は艶やかに輝いてゐる――南里は彼の若い友人の顏が、こんなに美しく晴れやかに輝いてゐるのを見たことがなかつた。

もう、これ以上に長く、見物する必要はなかつた。道化役者になりそこねた南里玄作は身體をえびのやうに屈ませて樹立の闇をくぐりぬけた。そして、ちやうど舞臺の花道のやうに星あかりの下に白くうかんだ敷石道を忍びやかに、表の潜り戸の方へ急いていつた。

潜り戸をあけるとき、しかし彼はもう一度窓の方をふりかへつた。だが誰も自分に注意してゐるものはなかつた。

「馬鹿にしてゐやがる、まるで大根役者の茶番ぢやねえか、ふつ！」

彼の身體は潜り戸から外に拔けようとするときあふれるやうな笑ひ聲がうしろに起つた。それはあの明るい部屋の中で溶けあつてゐる四つの感情のコーラスであつた。南里の唇にはひとりで微笑が

うかんだ。一日足らずのうちに急速なテンポをもつて事件が展開してきた。そして克彦を主役とする長々しい猿芝居がやうやく結末に近づいてゐることを感ずると彼は今更のやうに自分の運命の皮肉をかんじないではゐられなかつた。

「だがしかしおれの芝居はこれからだ」——彼は道化役者の衣裳をかなぐり捨てゝ大股に坂を下つていつた。

12

その次の日の夜、——もう十二時に近かつた。克彦は暗い雜木林の中の細い道を南里の家のある方角に向つて歩いてゐた。月夜である。大氣は妙に蒼白く、炮きつくやうな晝の蒸し暑さにくらべて夜風は初秋のやうにうすら寒かつた。

足元では雜草が露にしめつてゐた。耳をすますと、蟲の鳴く聲が遠く夜の靜けさの中に沁みるやうに聞えてくる。

彼の頭は何時になく晴ればれとしてゐた。心の底にこびりついてゐた殘滓のやうな妄念がすつかり拂ひ去られて、すべての思ひが新しく生々と燃えるやうに胸の中に輝いてゐた。僅か二日足らずの間であるのに、もう一年近い月日が流れ去つたやうな氣がするではないか。帝國ホテルの一室で、彼が

お互にわかれねばならないときの來たことを告げたときに、楊子江夫人の顏に現はれた深い絶望にみちた呪はしげな表情が一瞬間、彼の腦底をかすめた。だが、もう、それは遠い／＼出來事のやうに彼の心の底にはかすかな感傷の思ひすらも殘つてゐなかつた。頭の中のフィルムは彼の踏みしめる足音に調を合せて次から次へと急激な速度をもつてひろがつてゆく。——やがてうす暗い部屋の中で悲嘆に暮れてゐる二つの顏がうかびあがつた。父であり、夫である人の横死の報を前にして烈しい狼狽と悲しみのために顫へてゐる四つの瞳、

それはたとえやうもなく夢のやうな場面であつた。悲しみにとざされた部屋の中へ自分の姿をあらはしたときの美和子の顏をかすめた一抹の明るさ、——その前に膝間づいて彼女の手を握りしめた自分の姿をおもひだすと新しい昂奮がしきりに彼の胸に波うつてきたすべてが新しく生れ變つたのだ、といふ感じが彼を勇氣づけ奮ひ立たせた。

彼の眼の前には砂利を敷いた坂道が白く續いてゐた。その上にせかせかと坂をのぼつてゆく彼の影がうつゝつてゐた。

——この感激について誰よりも南里に話したい衝動がしきりに彼の歩調を速めたのである。しかし彼がちやうど坂の中ほどまで來たときだつた。彼は風の音がすうつと耳をかすめたのか感じた。その瞬間、一發の銃聲が深い夜の寂莫をやぶつてひゞいてきた。そのひびきは彼の頭の中を密雲のやうに

とざした空想をつらぬいて空の彼方に消えていつた。——

鍵盤を亂打するやうに彼の心臓は烈しく高鳴りはじめた。何事が起つたのか？何を考へる余裕もなかつた。彼は夢中になつて走りだした。

南里の家の前まできたとき、彼はおづ〳〵垣根に近づいて、そつと中を覗いてみた。電燈がつけないので部屋の中は眞つ暗だつた。彼は眸をこらしてぢつと前方の闇を見詰めた。そのとき雲をはなれた月光が白く椽側の一部を照らしだした。

「あつ！」

克彦は思はず叫び聲をあげて胸をうしろへ引いてみた。見よ！そこには蒼ざめた南里玄作の顏がさながら幽靈のやうに空間にうかんでゐるではないか！

13

「おい、——ど、どうしたんだ？」

克彦は顫へる手で垣根をしつかりと握りしめながら言つた。

「何でもないさ、こつちへはいれよ」

南里の聲には冷徹といふよりもむしろ幽嚴なひゞきがこもつてゐた。彼の足元にはピストルがころ

がつてゐる。白い煙がまだ陽炎のやうに小さい銃口のぐるりに漂つてゐた。二人は數分間向ひ合つたまゝ物を言はなかつた。ピストルの音におどろいて椽の下に逃げこんだ「クロ」がおそる〳〵這ひ出してきた。

「僕はね、報告に來たんだ、君の言ふとほり僕は新しい戀愛をはじめたよ、——いろ〳〵なことがすつかり新しくつくりかへられるんだ、——南里、僕は君に感謝するぜ、僕は生れてはじめて自分の力で能動的に動いたのだ……」

「もういゝよ、わかつたよ、君は昨夜、燦珠を訪ねたらう？」

「うん、過去の感情をすつかり整理するためにね」

克彦は知らぬ間に南里に近づいて、だらりと下げた彼の右手を力強くつかみながら、

「だが、どうして君はそれを知つてゐる？」

「見てゐたよ、植込のかげからね、——すばらしい大團圓だつた何しろ結構なことさ」

それは少しも皮肉な調子をまぢへないほがらかな聲だつた。

「ぢやあ、——あそこで咳ばらひをしたといふのは君なんだね、人が悪いな、何故入らなかつたんだい？」

「——最初はね、おれも一役演ずるつもりだつたんだが、君たちがやつてきてから舞臺の上に悲劇

的な要素がすつかりなくなつてしまつたからね、さうなるともうおれの出る幕ぢやないよ、だからおれは、君に拍手喝采をおくつて花道から引きあげたといふわけさ、それにしても今夜は如何して一人で來たんだい？」

克彦は默つて南里の顏を見上げた。何も彼もこの男は知つてゐるのだすべてのことを、さうだ、すべてのことを。

だから、說明することは何もなかつた。彼は視線をそらして、見るともなしに南里の足元にころがつてゐるピストルを見た。閣の中にその無氣味な輪廓だけが黑くうかんでゐた。

「いや、あの女はね、身邊に不幸なことがあつたんだ、ほら、新聞で知つてゐるだらう、あの女のお父さんが刑務所の中で自殺したといふことを――だから、僕も今夜はどんなにおそくなつても歸らなきやならないんだ、くれ〳〵も君によろしくと言つてゐたよ」

南里の顏には、始めてかすかな冷笑がうかんだが、しかし彼はすぐにほがらかな表情にかへつて、

「すると近いうちに結婚式があるわけだね」

「いや、――われ〳〵は形式的な結婚なんかしないんだ、もつと大きくお互を生かすために死ぬまで自由な戀愛關係で押通すつもりだ、そのことについてはいづれゆつくり話をするつもりだけれど……」

……」

「ところがね、その機會を待つてゐるひまがないんだ、僕は明日から旅に出かけるんだから」

「何處へ？」――

「何處まで行くか見當はつかないよ、君たちのやうな新婚旅行ぢやないからね」

南里は空を見上ながら言つた。しかしその眼が深い哀愁を湛えてゐるのを知ると、克彦は急に聲の調子を落して、――

「しかし、何だつて君は今頃ピストルなんかうつんだい？」

すると、南里は愉快さうに腹をゆすぶつて笑ひだした。――「つまり、合圖をしたのさ」

彼は足元にころがつてゐるピストルをひろひあげた。

「何の合圖を――」

「これから、おれの道化芝居の幕があくといふ合圖さ」

南里はさう言つてから急に克彦の方を向いて、

「さあ、そのへんまで君を送つてゆかうか、停車場の近くまでゆけばまだ圓タクがあるからね」

「さうだね、何だか妙に名殘が惜いけれど、しかし僕も愚圖々々してはゐられないからな」

時計を見ると一時を過ぎてゐた。二人は本門寺の裏をぬけて池上通りへ出た。街は死んだやうに靜かだつた。暗い道を右に曲ると鐵道線路が彼等の眼界を遮つて左右にひらけてゐた。二人は線路にそ

つた堤の下の道を歩いていつた。遠くシグナルの光が燃えるやうに輝いてゐた。ひよろ長い貨物列車が倦怠さうなひゞきを立てゝ通りすぎた。

踏切のそばにあるアーク燈のあかりが冷たく白い光を二人の頭の上に投げた。

「ぢやあ、此處で失敬しやう、さよなら」と言ひながら克彦は帽子をとつた。

「さよなら！」

南里は、しかし、低くうめくやうな聲でさう答へたゞけだつた。彼の眼は幾度びとなくうしろをふりかへりながら次第に遠ざかつてゆく克彦の姿を追つてゐたが、やがて彼は堤の上に這ひあがつた。彼の眼の前には幾條となくわかれた鐵道線路が無限の闇をつらぬいて同じ方向に走つてゐた。さながらそれは悠久の盡きぬ人生の苦悶を象徴する運命の線であるかのやうに。（了）

跋に代へて

（1）「世紀の夜」の執筆中、人生の危機を感ぜしめる一つの心理に到達した。それは僕の生活にとつて必然的なものであつたとも言へるし、小説の發展が現實の上にもたらした偶然の結果であつたとも言へる。何れにしても僕の心は最早、小説的幻想の世界に停滯することを許されなくなつた。これが「人生の失敗」であるか、「藝術の失敗」であるかといふ問題は今日輕々しく決すべきでないが、僕は今、この作品の價値を藝術の上に求めてはゐない。これは客觀的には十九世紀のニヒリズムの最後であるとしても、しかし、主觀的には明かに僕の思想の死滅であつたが故に。

（2）今にして思ふと、この小説を兎も角も書き終へたといふことさへ不思議な氣がする。ある時は新聞社の應接室で、あるときはカフェーの二階で、あるときは急行列車の中で、あるときは公園のベンチで——僕は藝術的純化と統合とをゆるさぬほどの慌しさで書きつゞけた。かういふ經驗はおそらく一生にたつた一ぺんしかあり得ないであらう。やつと最後の章を書き終へたとき（それは東京驛の待合室であつたが）僕はまつたくこれで人生が終つてしまつたのではないかといふ氣がした。そのときのほがらかさと、うすら寒い氣持とを忘れることはあるまい。

（3）「世紀の夜」の原稿は書き放したまゝ、整理することを怠つてゐたので、これをまとめるために非常に骨が折れた。轉變の烈しい生活の中で新聞の切抜さへも散佚してしまつてゐたのである。それ故「氷川由紀子」といふ未知の人から切抜帖の寄贈を受けなかつたら、この書の出版は途方もない困難に遭逢したかも知れない。さういふ讀者の好意に對して、僕は感謝する前に自ら深く耻づるところが多い、それにしても、住所も書かねば名前さへも多分匿名であらう、唯一冊の美しく製本された「世紀の夜」がある朝飄然と屆いた時ほど僕が心の豐かさを感じたことはあるまい。

（4）この小說執筆中、作中人物の南里玄作は僕自身であり、荒川克彥は目下巴里にある中野秀人君であり、女優燦珠は、花柳はるみ氏をモデルにしたものであるといふ噂が立つた。（そのことについて花柳氏も何處かで書いてゐられたやうである）、

しかし、これはまつたく出鱈目にひとしい流言である。この小說の中には現存人物のモデルは一人もゐない。大體、そんな人物を見つけてゐる暇はなかつたのだ。若しモデルがあるとしたら、それはいふまでもなくすべて僕自身である。僕自身の投影である。

昭和五年十一月十五日印刷
昭和五年十一月二十日發行

世紀の夜
定價一圓八十錢

著作者　尾崎士郎
發行者　磯貝吉之進
印刷者　渡邊一郎

發兌　東京櫻田本郷町交叉點際櫻田館內
電話銀座三五四一番
振替東京二五九三五番
近代生活社

中外印刷株式會社印刷

最新刊

添田啞蟬坊著
淺草底流記
四六版美裝三四〇頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

月刊
近代生活
定價四十錢
送料一錢五厘

603
230

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black